

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成20年6月1日発行 毎月一回 11頁発行
俳句雑誌「沖」第39巻第6号



俳句雑誌[おき]

6
月号

沖
発行所

二師連袂

能村 研三

姨捨句碑

本年の同人研修会では、久しぶりに長野県の姨捨にある登四郎・翔の連袂句碑を訪ねることが出来た。

この句碑は、今から二十二年前の昭和六十一年の春に当時の信濃支部長だった湯本道生さんが発起人になって地元や「沖」の皆さんからの寄付を募って建ったものである。枯れ果てて信濃路はなほ雪の前

くるみ割るこきんと故郷鍵あいて 登四郎 翔

「沖」の創刊十五周年に加えて、先師が蛇笏賞を受賞したこと、そして先師と翔先生が長年の交友を重ね「沖」が構築されたことを記念して建てられた。

翔先生は、長野県のお生まれで、この句は先生の代表句の一つとして皆に愛誦されている句だが、先師の句はこの句碑の建立に合わせて作られたオリジナル詠である。

先師は「沖」の発刊以前は殆ど長野県に旅をしたことがなかった。それは人間を詠うことが中心で自然の花鳥を詠うことが余りなかったからではないだろうか。

しかし、「沖」が創刊され湯本道

養花天スイツチバツクの停車駅

姨捨八句

春望の向きにベンチや山小駅

春闌けて二師連袂はとこしなへ

師に見^まみゆごと春光の連袂碑

囲みゐる田毎の畦は青極む

棚田へは水のきざはし花信濃

棚田ごと主の名ありてうららし

田毎より棚田と変はり青き踏む

いく筋の轍いづくかみどりの日

曇り日が多き朴花のふなり年

生さんが信濃の支部長になつてからは長野県に行くことが多くなつた。おそらく創刊後一番訪れたことが多い県の一つであつたと思われ、句境に変化があつたことも推測できる。

句碑は、私たちが訪れる十日くらい前に藤森すみれさんをはじめ南信濃支部の皆さんがきれいに掃除をしていただいたお陰で、建立当時と同じようにびかびかに光り輝いていたのはありがたかつた。

信濃はちょうどこの時が花時で、桜に加えて、梅や桃、そして杏などが一斉に咲き、まさに桃源郷にいるような気持になつた。この吟行会には湯本さんも特別参加していただき昔の話にも華が咲いた。まもなく登四郎忌が来るが「沖」の皆さんと先師の供養が出来たことは何よりであつた。

能村 研三



若葉どき

林 翔

裸婦の絵

私の母校の内、小学校は（旧名）東京市本郷区立千駄木小学校であった。当時は一組・三組が男子組で、二組・四組が女子組という編成であった。大正期だから、男女共学ということは無かったのである。

私は一組に属していたが、一組で組長に選ばれることの最も多かったのが葦名芳夫君であった。成績優秀で行動も活潑だったからである。

小学校卒業後、中学校は別々に進学したので、会う機会は少なくなつたが、友情は続いていた。中学校の卒業も近づいた頃、私がびつくりしたのは、葦名君が東京美術学校（現芸大美術学部）に進学すると知った時である。秀才の葦名君だから、一高―東大の秀才コースを進むものと同様に思い込んでいたのであった。

数年後、美術の秋には葦名君の属する画会の展覧会案内状が来るようになったが、更に数年後、待ちに待っ

陽と風に喜びそよぐ白木蓮

母が唱ひし歌口ずさみ春も逝く

水張田天つ光と溶け合へり

雨ほつりほつり四葩もほつり咲き

名ぐはしき「虎嘯」や雨の縞菖蒲

青葉若葉見る眼にいのち足萎ゆとも

絵扇も美し使ふ手の白愛し

どくだみや古自転車は野に朽ちて

新茶を贈らる

新にして深とや言はむ茶の香り

阿部きぬさん来訪

主客併せて百八十七歳庭若葉

た個展の案内状が来た。

早速、会場に赴き、一通り覽た中で私が買いたいと思つたのは、横30cm、縦45cmほどの小さな裸婦の絵。両手を頭の後ろに組み、やや斜めに立つて、腰から下は省略されている。「こんな素朴な裸婦の絵は無い」と私はすっかり気に入ってしまった。値札を見ると15万円。当時の私としても、払えぬほどの大金ではない。会場に居た葦名君に早速申し込んだら、「林君に定価で買つて貰っちゃ悪いなあ。」と考え込み、「そうだ。おまけを付けて送ることにするよ。」と言ってくれた。

裸婦の絵は二階の私の寢室に、おまけの風景画は大きいから、一階の客間に飾つてある。

林 翔



蒼茫集



癌去らず

富岡夜詩彦

癌去らず 春暁男泣きもする
いまひとりの吾が死ねよと桜の夜
癌病めば句作は禱りさくらの夜
花冷のひと来て覗く 柩窓
暮春の旅へひとり 柩の舟に乗り
止めどなく 落花柩の出づるを待つ

春惜しむ

藤森すみれ

ぞんぶんに 鋏使ひ春でありにけり
句碑守り桜はいろを濃くしたり
句碑ありてこそ の 姨捨春惜しむ
句碑裏のわが名なぞれば 緑さす
山ざくから 田毎は水を待ちてをり
雪を脱ぐ 滝のイオンを体内に

人とゐて

武藤嘉子

干し物に湯気ほのと立ち水温む
疲れ目をいやす 辛夷の夕かな
天界へ文とどけたし 鳥雲に
鳥雲に入りてわが身に 残るもの
人とゐてひとりの 時間夕ざくら
そぞろ来て春を惜しめり 播磨坂

春あけぼの

北川英子

祝紗惠様
華燭の 日春あけぼのの 月完円
霞草みんなをやはらかく 東ね
消息の 廻りまはり来 彼岸過ぎ
北信五岳どの 一岳の 雪解川
眠らずに 狂はずに 夜の桜散る
池田満寿夫美術館
花もも杏そして 満寿夫のエロス

惜 春 溯 上 千 津

捨てられぬ物を置き換へ花明り
花冷の書架にもどす書一礼す
そばだてて又も空耳春の闇
すれ違ふ善意いくばく花の雨
惜春の堆朱の筒や供花叶ふ
花冷や己はげます十指組む

春の夢 森岡正作

紫雲英田の深きにランドセル三つ
春景色まだ原色の青持たず
春の夢鳩サブレーの抱卵す
四十八枚田打つに先駆く水の音
花杏千曲川は曲ることに倦み
双眼鏡景引き緊めて春逝かす

英 靈 上 谷 昌 憲

芽吹かんとせし山裾の赫らめる
禽影の淡く睦める柳の芽

甲斐駒は芽解きの雨に隠れたり
黒縁の眼鏡の遺影さくらの夜
いつか死ぬ人ぞろぞろと花の昼
英霊の真つ白な嘘花ふぶく

忌を修す 荒井千佐代

草摘みて右手冷たし左手も
晩霜予報ことさらに星輝うて
呪誼のごと宿木の巻く涅槃西風
霾れりフェリーは巨き口開き
走り根の上に走り根百千鳥
忌を修す花菜圃ひの磯墓に

一 対 辻美奈子

看取る口の気泡つぎつぎソーダ水
すこし泣いてさくらの下を過ぎにけり
癒ゆる日の父待ち給へ飛花落花
大腿骨股骨骨頭頭骨まるし春あけぼの
人工骨真白く写る蝶の昼
ちちははの一对やそらまめの莢

潮鳴集



六文銭

中尾公彦

花は葉伝通院二句に新作ランチはイーゼルに

手の見えてバレエ教室蝶の昼

姨捨山三句

スイッチバック春耕の段重ね

かはづ鳴く姨捨駅の乗車券

六文銭より薫風の抜けて来し

惜 春 服部 早苗

坂のぼり坂くだり春惜しみけり

糸桜ゆれて女性の墓と知る

終焉の地に花屑の高たかし

花の雨都電大きくカーブして

野に吹けば野のいろをしてしやぼん玉

花吹雪

掛井広通

新たなる色を探しにしやぼん玉

千切り絵の太陽に顔あたたかし

風に果てあらば点らむ春夜なり

花吹雪耳削ぐほどの一片か

知恵の輪も十指もやがてかぎろへり

植物園 林 昭太郎

惜春や小さき切符の植物園

逝く春の植物園に長き塀

花おぼろ真水が海へ入るとき

縦線の多き組織図鳥雲に

燕や都電ここより折返し

沖作品



能村研三選

翔先生のお声の凜と初桜
雀鳴く紫烟草舎は花隠れ
うららかに魚は眠りを解かれけり
貝殻の中にかひがら汐干岩
雨あがるらしき囀パンを焼く
畦少しくづし雪しる水走る
細り立つ白樺芽吹く北斜面
白鳥引き空のさざなみ鎮まらず
うららかや子の手櫂とも翼とも
魚にふる塩の湿りや鳥雲
雪折れの水仙それでも咲いて見せ
山空のまだ眠き色辛夷咲く
大江山の鬼の気性の雪解川
指先の香にまみれ摘む露の臺
山の日の引力に挙ぐつくづくし

市川市

宮島 宏子

北海道

梶川智恵子

京都

おかたかお

狐火や五指より放つ静電気
白魚に見られたるかな喉仏
ため息はもとに戻らず陽炎へり
滑走路翼を沈め陽炎へり
水を嘗め鬪ふ恋の猫となる
昭和遠し種痘の痕の淡さかな
春愁か一刀彫師の黙深し
むかし住みし家より声す夕朧
散るさくら観音の手に足もとに
流木のたゆたふ夕べ鳥帰る
逆上がりできぬ子の吹くしゃぼん玉
春服の芯ある男だと思ふ
逃水の混み合ふ明治通りかな
水底の魚を目で追ふ春愁
花冷や文字の掠るるファクシミリ

茨城

岡澤 田鶴

千葉

峰 幸子

長崎

小林 奈穂

沖作品 15句選評

*

能村研三

雀鳴く紫烟草舎は花隠れ

宮島 宏子

市川の国府台の里見公園に北原白秋ゆかりの紫烟草舎が移築されている。当時小岩にあったこの離れにおいて、すぐれた作品の創作を続けられ白秋自ら紫烟草舎と名づけた。その後、江戸川の改修工事のために解体されたが、白秋が小岩に移り住む前、真間の亀井院に住んでいたこと、小岩に移ってから対岸の江戸川堤から眺めるこの里見の風景や万葉の昔よりゆかりの深い葛飾の野を、こよなく愛していたことにより里見の地に復元された。この頃の白秋は窮乏の極みであったが『雀の卵』では「米櫃に米のかすかに音するは白玉のごとはかなかりけり」とうたい、その米を雀に与え飢えながら雀と哀歎を共にする日々であった。里見公園はたくさん桜の木があり、花見でも賑わうが紫烟草舎をすっぽり隠してしまうほど桜がたわわに咲いていた。

細り立つ白樺芽吹く北斜面

梶川智恵子

いかにも北海道らしい光景である。ゴールデンウィークが終わると北海道の春はこれからが本番で、遠望する山の残雪の白さと、桜の咲き始めた頃のピンクは美しく、芽吹いた白樺の薄緑の若葉は新鮮で美しい。白樺は寒冷地に育つ木なので、幹自身も細身で風雪に耐えられるように成育している。そんな訳で風などによって倒れやすく、木の寿命としては短いと言われている。寒さに耐え北斜面に細り立つ白樺の木の生命力に人間も勇気づけられるのである。

大江山の鬼の気性の雪解川

おかたかお

丹後の大江山には、酒吞童子にまつわる伝説が残っている。平安時代中期、京の都を荒らし回った大江山の鬼、酒吞童子を、源頼光が酒に酔わせて騙し討ちに退治した話は、謡曲などでも有名だが、大江山に源を発し、丹後半島の付け根岩滝で宮津湾に注ぐ野田川という川があるそうだ。この流域には古代遺跡や製鉄遺跡が点在している。雪解の野田川も何か鬼の気質を含んでいるかのような様相に見えた。

白魚に見られたるかな喉仏

岡澤 多鶴

白魚は、体長約十センチくらいで細長い形状をしたシラウオ科の魚のことで、生きている時は透明で、茹でると白くなるので「白魚」と呼ばれている。冬から春にかけてが旬で、淡白で上品な味を生かして、生や酔の物、吸い物、卵とじなどで食べられる。この句の面白さは食べられてしまった白魚が、人間の体の内側から喉仏を見ている独特なシチュエーションである。